

きらり 企業

ラッキーソフト (平塚市)

事故危険性体感して防ぐ

製品化を主導した三田村もな美社長(46)は「交通ルールを守っていても、命の危険を

感じる場面はある。つらい思いをしてほしくない」と思いを語った。

時、駐車場から突然出てきた車にはねられた。息子にけがはなかったが、自身は首や腰などをけがして2か月ほど痛みが続いた。

三田村社長は、仕事と3人の子どもの育児、認知症になった義母の介護をしていた7年ほど前、交通事故にあった。当時1歳だった息子を自転車の前かごにのせて走っていた

この事故がシミュレーター開発のきっかけとなった。最初は事故後に被害者を助けるか、救急車を呼ぶか、逃げるかの単純なプログラムから始まった」と当時の思い出を語る。

れたときは「跳び上がるほどうれしかった」と振り返った。現在は36都道府県の警察本部などに計90台が導入され、小学生的交通安全教室などにも活用されている。

今年3月には運転時に必要な基礎能力の向上を促す新システム「運転基礎能力トレーニング」を発売する。東京・池袋で昨年4月、11人が死傷した交通事故など、高齢者による悲惨な事故が多発したのをきっかけに開発を進めていた。

前方と左右を映し出す三つの画面には交差点が表示され、足踏みをする、歩いていくのかのように映像が動き始める。そのまま進むと、停車した車の脇から自転車やバイクが飛び出し、ぶつかりそうになる。交通事故の危険性を体感できるシミュレーターだ。

信号の有無や交差点の大きさなど、設定できる状況は9種類。雨や雪などの天候、夕方や夜といった時間も自由に選択でき、それぞれ2〜3分で体験することができる。

5年ほど前から、仮想現実(VR)のゴーグルを利用して、トラックの運転手の視線や子どもの視界などを体験できるプログラムの開発も手掛けるなど、交通事故防止に役立つ技術を次々と発表している。



シミュレーターの開発を主導した三田村社長

2012年7月に鉄道シミュレーターの開発を主軸事業として設立。従業員は21人。現在は交通シミュレーター歩行者編」を販売。その後「同自転車編」、「同自動車編」を順次開発した。16年9月には横浜市電保存館(横浜市磯子区)にシミュレーターを導入した。資本金は500万円。

シミュレーターを作る技術を持つ社員が転職してきたことも重なり、開発は進んだ。だが、完成したソフトを県警に提案すると「道路や信号の形状がおかしい」と基本的な部分を指摘された。それから、全国の道路の規格や標識について学び、プログラムに組み込む内容の試行錯誤を続けた。

2015年9月に徳島県警でシミュレーターが初導入された。今後は、地震や火災の防災プログラムなど、交通事故以外のシミュレーター開発も目指すという。三田村社長は「安全な社会になるよう、様々な分野で技術を生かしていきたい」と語った。

(後藤理央)